



## 教職大学院各部会の動き（各部会長からのコメント）



### 総務部会長 瀧本 壽史 「道在近」

通常の大学院は研究者養成の場であり、同時に、院生は研究者として扱われる。従って、学部で学んだ教員と同じ立場となり、先を行く研究者、あるいは共同研究者ではあっても、もはや師弟関係にはない。院生は学界に一泡吹かせようと、入学当初から修士論文の作成に取りかかる。それが一般的である（と思っている）。

翻って、教職大学院はどうか。最終審査は「学習成果報告書」である。学界を揺るがすような論文を目指すものではない。授業やゼミ、先行研究、そして多くの実習から学んだ「理論」と「実践」を往還させながら、学校現場で役立ち、学校現場の課題・ニーズに応えられるような内容を含んだ報告書であればいい。それこそが価値のある「報告書」となる。失敗事例も逆に役立つことが多い。また、今後の課題のない報告書はあり得ないのであり、発展性もない。その課題には、修了後の学校現場で継続して取り組めばいいのである。

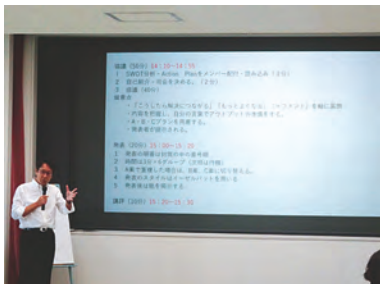
孟子曰く「道は近きに在り、しかるにこれを遠きに求む」。道を遠くに求めてはいないだろうか。総務部会は院生の近き足元を支援していきたいと思っている。



### 教務部会長兼FD推進部会長 上野 秀人

教務部会では、教職大学院における『教育課程の「計画」「円滑な実施」「評価」「改善」に努める』ことを目標に活動しています。主な内容は①履修案内等を検討する教務業務全般、②時間割等を作成・確認・修正する教育課程の検討、③シラバス等を確認・修正する各科目の内容等の検討、④院生からの授業評価を実施・分析・周知する各科目の教育成果検証、⑤認証評価に向けた準備、⑥授業内容・方法等を改善し向上させるため組織的に研修するFD（ファカルティ・ディベロップメント）推進活動です。授業科目数は43科目、どの科目も研究者教員と実務家教員による演習形式で行うことや教育学部のみならず医学研究科や農学生命科学部の大学教員、

県・地教委・学校等の教育施設の指導者の協力のもと院生の学びを支えています。どのように配列・関連化するのか、どうすればさらに院生のためになるのかを少しずつ改善できるよう努めています。院生とは、授業科目ごとの評価アンケートや年2回の懇談会の中で意見交換しながら共に教職大学院をつくっています。この日々の改善が最後は青森県の子どもたちにつながると信じているからです。



### 実習部会長 三戸 延聖

私からは実習の事例報告をする。去る8月9日に県総合学校教育センター（以下「センター」）で平成30年度の「ミドルリーダー研修講座」（前期）が開催された。昨年度に引き続き、センターと弘前大学教職大学院とのタイアップによる実施である。本学に在籍するミドルリーダー養成コースの院生については、シラバス上にも位置付けられた仮説形成（Making a hypothesis for study）のための科目（3単位）を構成する実習であり、県内の6教育事務所及び県立学校長からの推薦・希望を併せ小・中・高・特別支援の先生方28名に本学の8名の院生を加え、



本学に在籍するミドルリーダー養成コースの院生については、シラバス上にも位置付けられた仮説形成（Making a hypothesis for study）のための科目（3単位）を構成する実習であり、県内の6教育事務所及び県立学校長からの推薦・希望を併せ小・中・高・特別支援の先生方28名に本学の8名の院生を加え、

学校の組織力を高めるための実践的な演習と協議を中心としたワークショップが展開された。企画にあたっては本学からは私を含め4人の大学教員が当日センター入りし、運営にあたってはセンター義務教育課との間で綿密なシミュレーションを行った上で実現の運びとなった。

来る12月27日(木)は、今回の自校を俯瞰したSWOT分析を踏まえたアクションプランの経過を報告することとなっている。実習はすなわち「実地に、または実物をもって学ぶこと」(『日本国語大辞典』)である。院生にあつては、実地・実物の刺激を後期の自らの学びに生かし、理論と融合させてほしい。



### 入試フォローアップ部会長 小林 央美 「学びたい学生へ情報が届くことを願う広報活動」

教職大学院が発足して2年目を迎えております。入学定員は、ミドルリーダー養成コース(現職教員)と教育実践開発コース(学部卒)がそれぞれ8名の計16名です。ミドルリーダー養成コースにつきましては青森県教育委員会からの派遣をいただき充足しております。学部卒の学生がカリキュラムを理解し進学を希望していくような「広報活動」については、多くの方々のお力添えもいただきながら進めているところですが、少々、苦戦しています。そんな時、学部卒の院生がこんなことを言ってきました。「先生、もっと、私たちを活用してください。入学してよかった事をむしろ後輩に伝えたいと思っています」というものです。

私は、はっとしました。広報活動を「業務」のように捉えていたことに気づかされました。次の瞬間、イギリスの教育哲学者ウィリアム・アーサー・ワードのあの有名な言葉を思い出しました。「凡庸な教師はしゃべる。よい教師は説明をする。優れた教師は示す。偉大な教師は心に火をつける」です。学びたいという灯火を少しでも持っている学生へ、きちんと学びの心に火をつけるような広報活動を考えなければと思いました。「The great teacher inspires」教職希望のゼミ生等がいましたら、お声をかけていただければうれしく思います。



## 二年次院生による中間報告会の開催

青森県が直面している教育課題に対して、理論と実践との往還・融合を通じた省察をもとに、学校内外の専門家と協働しながら、その解決に向けた教育実践を創造しリードしていく教員を目指して、昨年度より教職大学院がスタートしました。

その院生一期生が平成30年2月10日(土)に年次報告会を行い、自身の研究テーマをもとに第1回目の取組内容を皆様に報告しました。現在その取組を更に進化させながら、よりよい教師、より優れたミドルリーダーを目指して頑張っているところですが、その中間報告会を10月27日(土)弘前大学教育学部において下記のとおり開催いたします。既に中間報告会のチラシとして皆様にご報告していますが、改めて皆様の参加を心よりお待ちしております。



**期日・時間** 平成30年10月27日(土) 9:00~16:50 (受付8:30) **平成29年度 年次報告会**  
**場 所** 弘前大学教育学部(中教室、202教室、203教室)  
**次 第**

- (1) 全体会開催 (9:00~9:15 中教室)
- (2) 二年次教育実践開発コース研究報告 (9:20~11:45 202、203教室)
- (3) 入試説明会 (11:50~12:30 203教室)
- (4) 院生ディスカッション「一年次、二年次の院生全員、グループ討議」 (13:20~14:20 中教室)

討議テーマ:「教職大学院での学びや実習から得たものや同僚教職員への働きかけ」

- (5) 二年次ミドルリーダー養成コース研究報告 (14:30~16:40 202、203教室)
- (6) 全体会閉会 (16:40~16:50 203教室)



平成29年度 年次報告会



## 二年次院生からのメッセージ



**教育実践開発コース**  
**神尾 龍太郎**  
**研究テーマ**  
**主体的に学ぶ中学校国語科**  
**～教材研究に注目して～**

研究内容を検証するため、「単元を通した課題解決をめざす言語活動」を取り入れた授業を複数実践しました。授業の翻案過程においてどのように授業を形作ったのかということ、そして実際の手立てと最終課題の結果をまとめ、報告したいと考えています。

生徒が最終課題を完成させるまでの見通しをもって活動に取り組み、毎時間学習に必然性を感じながら自然と授業に参加している様子を実現したいと考えて、この研究テーマで研究を行っているので、生徒がそのような様子になっているかどうかをメインとして聞いてほしいと思います。



**教育実践開発コース**  
**斗 晴 晴 加**  
**研究テーマ**  
**子どもたちが主体的に学ぶ**  
**社会科**  
**～グループワークの活用～**

中間報告会では、今年度実習校で行った授業実践を中心に、子どもたちが主体的に学ぶための授業方法についてまとめていきたいと考えています。

今年度は実習校で昨年度以上に多くの授業実践をさせていただきました。先生のご指導のおかげで昨年度以上に充実した授業実践を行うことができました。この授業実践から、主体的に学ぶための学習課題の設定やグループワークの活用方法などについて授業実践を参考にまとめたいと思います。



**教育実践開発コース**  
**竹 谷 涼**  
**研究テーマ**  
**中学校社会科における学習**  
**意欲向上のための指導**  
**～社会経済的要因から学習**  
**意欲の格差が生じる時代背**  
**景を踏まえて～**

調べて分かった日本の社会的経済的格差の現状とその影響や、私自身の経験などから、「子どもの貧困」に興味を持ちました。その上で、教員として子どもの社会経済的背景を踏まえながら教育活動に取り組むことが大切であると考え、課題の一つとしても挙げられる「学習意欲」の向上に焦点を当てながら実習や研究に取り組んでいます。

学習意欲向上のために、専門教科である社会科の

授業を通して、生徒が社会的事象を自分に関わるものとして捉えられるような工夫を考えています。



**教育実践開発コース**  
**阿 蘇 優 香**  
**研究テーマ**  
**生徒の自己肯定感・自尊感情**  
**を高める手立て**  
**～ほめることと認めること**  
**の実践を通して～**

生徒との信頼関係づくりを最終ゴールに掲げ、その段階の取り組みの一つとして生徒の自己肯定感・自尊感情を高めることを考えました。自己肯定感や自尊感情を高めるための研究で多くなされているのは、他者からほめられる、認められる場面を活用した授業です。そこで本研究では、英語や道徳の授業を活かし、生徒の自己肯定感や自尊感情を高めるための手立てに関して検討していきたいと考えています。



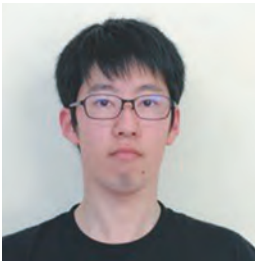
**教育実践開発コース**  
**木 村 文 香**  
**研究テーマ**  
**児童が主体的にコミュニケーション**  
**を図ろうとする小学校**  
**外国語科の授業づくり**  
**～コミュニケーション活動**  
**の工夫を通して～**

「児童が主体的にコミュニケーションを図る力を伸ばす小学校外国語科の授業づくり」について研究しています。本年度の実習では、児童が目的意識をもってコミュニケーションを行う活動を実践してきました。また、研究テーマと並行して2020年の教科化に向けた「書く活動」の実践も行いました。実際の活動内容や児童の自己評価をまとめ、報告したいと考えています。



**教育実践開発コース**  
**田 中 宏 樹**  
**研究テーマ**  
**健康に関わる知識・技能を**  
**実生活に生かす教科連携的**  
**な学び**  
**～自分との関係性を高める**  
**活動を通して～**

高校生が「今」の生活と「将来」の生活において健康に関わる知識・技能を生かすためには、教科連携的な学びをすることや自分との関係性を高める活動を取り入れた保健体育授業が重要だと考えます。実際に実習校では、保健・体育を織り交ぜた単元配列表と他教科との繋がりを書き記した「健康単元」を作成し、授業実践を行っています。中間報告会では、これまでの研究の成果を生かせるよう尽力します。よろしくお祈いします。



**教育実践開発コース**  
**新山 裕大**  
**研究テーマ**  
**授業における深い学びの追究**  
**～数学の授業実践を通して～**  
新学習指導要領にも挙げられている一つに、この「深い学びが」があります。ど

のような働きかけで深い学びに至るのか、授業という場に注目しました。授業に追われて、テーマを見失いかける時もありましたが、生徒のためになるように頑張りました。深い学びに向かうためには、それを行うだけの知識も必要です。しかし、それを習得するだけならば、授業で行う必要はないと思います。授業ならではの、深い学びに至る活動を行えたと感じたので、中間報告では、自信を持って発表したいと思います。



**教育実践開発コース**  
**佐藤 洋晟**  
**研究テーマ**  
**高校数学における主体的な学びを促す授業づくり**  
**～ペア学習，机間支援を通して～**

私のこれまでの経験から、進学に重点を置いている学校では問題演習が中心となっているため、関心・意欲・態度や数学的な見方や考え方の向上は望めないのではないかと思います。そこで生徒指導の三機能を意識し、ペア学習と机間支援を授業に取り入れることで、生徒の主体性が養われるのではないかと考えました。しかし、一度実践したが良い結果が得られず、その原因が教員から生徒に対する働きかけのみであったからであることに気がきました。そこで今後は「生徒同士での活動」をより意識した授業実践にしていこうと思っています。



**教育実践開発コース**  
**八柳 匡**  
**研究テーマ**  
**公民科におけるパフォーマンス課題の導入**

パフォーマンス課題とは、詳細な場面設定がなされており、様々な知識やスキルを総合的に使いこなすことを求めるような課題のことです。私は、これを高校の公民科の授業に取り入れることで授業内容がより深く学ぶことができるのではないかと考え研究しています。

その一環として、5月に4時間の単元構成で授業実習を行いました。一人一人が授業内容と個人の経験や考えを結び付けながら課題に取り組んでくれて

いました。



**教育実践開発コース**  
**三上 悟**  
**研究テーマ**  
**地域史や地球史の観点を取りこみつつ、「国家」を主語とする教科書の記述を捉えなおすことで、生徒の主体性や学習意欲を引き出すよ**

**うな世界史の授業の開発**

自分が高校生のころ、世界史の授業は、先生の「こぼれ話」が何よりも楽しい授業でした。しかし「こぼれ話」の後には、粛々と教科書の読解に戻り、受験体制に入るような授業でした。自分が



教員を目指すようになり、それだけでは十分でないという思いを持ちました。教える側からこぼされる話題を受け取るだけではなく、学習者が自らテキストを読み込んで、面白さに気付いていく、そんな授業を目指して、日々研究を行っています。



**ミドルリーダー養成コース**  
**長谷川 泰樹**  
**研究テーマ**  
**児童の主体性を育むキャリア教育のアプローチ**  
**～地域の課題を考えさせる単元開発を通して～**

当初の研究計画を修正して、副題を「地域の課題を考えさせる単元開発を通して」としました。キャリア教育の視点からのアプローチをすることで、児童の主体性を育てようとする目標は変わっていませんが、児童に地域の一員としての当事者意識をもたせ、主体的に課題を発見し解決のための方策を考えさせることで目標に迫ることができるのではないかと考えました。現在は、10月からの実践に向けて、データの収集や指導案の作成、ゲストティーチャーの調整等を行っています。中間報告会では、今後の計画を中心に発表させていただきますが、このことを通して私自身が地域のことを知るきっかけとなっています。児童のより良い学びとするためにもたくさんのご意見をいただければ幸いです。





**ミドルリーダー養成コース**  
**赤垣 由紀子**  
**研究テーマ**  
**教員の資質向上に相乗効果**  
**をもたらす若手教員の育成**  
**～校内における主体的な学**  
**習会を通して～**

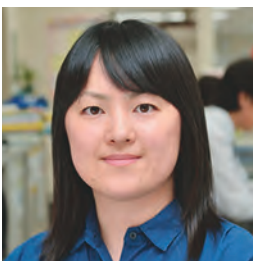
現場における教員間のつながりは資質向上に大きな影響を与えるものだと感じています。そこで、大学院での学びを生かしながら、教員の資質向上に相乗効果をもたらす主体的な学習会を組織し、若手教員の育成の在り方を究明したいと考えています。

一年次・二年次とも、勤務校の教職員・上北管内の多くの先生方が協力してくれています。これまで出会った先生方からの言葉は、教員として大事なことであり、伝えていきたいことだと感じました。同じことを大切に思う仲間がいることに感謝する機会となっています。



**ミドルリーダー養成コース**  
**大里 智子**  
**研究テーマ**  
**総合的な学習の時間における**  
**キャリア教育**

キャリアプランニング能力の育成を目指し、キャリアアップについて考えさせる機会と、職業生活上の困難を乗り越えるスキルについて考えさせる機会を取り入れた、総合的な学習の時間におけるキャリア教育の実践に取り組んでいます。授業づくりにおいて、目的とブレのないようにすること、学びの効果を測ること、全クラス同じ学びができるよう授業担当の教員たちと打ち合わせをすることを重視して進めています。



**ミドルリーダー養成コース**  
**外川 知絵**  
**研究テーマ**  
**定時制高校におけるキャリア**  
**発達を促す「総合的な学**  
**習の時間」の在り方**  
**～場や集団の工夫と外部資**  
**源の活用を通して～**

私は現在、定時制高校生たちと学び、「生きること」について共に考えています。それは単に、どの企業・学校に進むかの選択ではなく、社会と自分との関わりをどう築いていくかという課題です。多くの気づきが得られるよう、「総合的な学習の時間」での外部資源の活用等に取り組んでいます。卒業生や先生方の知人を招いての授業では、生徒と教員だけではできない会話が生まれました。本校の内部資源の活用にも力を入れ、今後たくさんの目と手で学びを作っていきます。



**ミドルリーダー養成コース**  
**中田 泰人**  
**研究テーマ**  
**同僚性を高める校内研修の**  
**あり方についての一考察**

校内研修をより充実させるために【学校課題や研究主題等を把握、共通理解し、「自分のこと」として捉えること】、【参観、協議の視点を「子供の学び」を中心にし、効果的な協議会を行うこと】、【互いの授業から学び合い、自分の課題を振り返ること】の工夫を行うことで、教員間の同僚性を高め、日常的な学び合いや授業の工夫・改善がより積極的になされるようになるのではないかと、という研究仮説のもと、勤務校で進めた研究・実践を発表します。



**ミドルリーダー養成コース**  
**坂本 寛実**  
**研究テーマ**  
**段差のない小中連携の在り方**  
**～アセスの分析等を通して～**

同一児童生徒の小学6年と中学1年のアセスデータを統計ソフトを使って2年分分析し、移行期における適応感にどのような変化があるのかを探った。1学年約60名であるが、全体では傾向が見えづらいため、小学6年の適応感上位群と下位群それぞれ約30名ずつで分析を行った。また、アセスデータだけでなく、移行期におけるギャップを探るアンケートも行い、それらの結果から具体的にどのように小中連携を進めていけばいいか、小中の教員同士で話し合うきっかけとしたい。



**ミドルリーダー養成コース**  
**工藤 恵代**  
**研究テーマ**  
**不登校の予防を目指した校内**  
**研修の在り方**

久しぶりに現場に戻り、本校の先生方のサポートのおかげで充実した日々を送らせていただいています。

本校には登校をしぶる生徒が若干名おり、その対応への負担感や多忙感を感じている先生方がいます。そういう生徒への対応力を身に付けてもらえるような校内研修を何度か実施しました。また、2学期は引き続き、気軽にコミュニケーションを図ることを目的とした日常的な談話タイムを実施しているほか、実際に不登校生徒の対応に苦慮している先生方中心に、外部関係者との協働を図りながら、その在り方についての探究を深めています。

中間報告会では、これまでの実践から得られたデータの分析結果及び、これからの活動の方向性を

発表したいと考えています。少しでも同じように苦慮されている先生方の参考になればと思っています。



**ミドルリーダー養成コース**  
**小泉 朋子**  
**研究テーマ**  
**教員のニーズに基づく研修**  
**やサポートの在り方**  
**～若手教員や他校種・他障害**  
**種の特別支援学校から異動し**  
**てきた教員を中心に～**

今年度勤務校に戻り、研究テーマに関連して、昨年度実施したアンケート結果に基づいた新任者研修の内容変更や、ニーズに基づいた選択研修会を実施しました。中間報告会では主に、それらの研修会の内容に関する報告をします。また、管理職の先生方をはじめ、周りの先生方にもご理解とご協力をいただきながら、協働的に実践を進めることができていることへの感謝の気持ちも込めながら報告することができればと思っています。

## 前期の学修を振り返って

一年次ミドルリーダー養成コース

稲葉 友輝（青森市立浪岡北小学校教諭）



学校現場を離れ、大学院での学生生活も半年が経ちました。入学当初思い描いていた、というより、分からない部分が多かった「教職大学院での学び」というものが、4月、5月と日が経つにつれて、日々の授業や

大学の外での実習（教育関連施設実習、附属校での授業、各校の研究授業・校内研修への参加）などを通して、そのカリキュラムの実態が見えてきました。と同時に、自分の中で分からなかった部分、足りなかった部分も見えてきたように感じています。院生の仲間と前期を何とか乗り切り、様々なことを学んだ今、思うことは、ミドルリーダーとして、学びをどう生かすか、どうつなげ、どう広げるかについてです。これはとても難しいことだと感じています。学習指導要領が変わる今、学校は変わるチャンスを迎えています。教師が変われば子どもも変わるはずです。国家レベルの変革を、子どもたちの確かなプラスにつなげられるように、学び続ける教師でありたいと思います。

一年次ミドルリーダー養成コース

工藤 由紀（七戸町立天間林中学校教諭）



想像以上のハードなカリキュラムに、思い描いていたキャンパスライフとはほど遠く、入学当初は、授業を受けるたびに教師としての力量不足と自身の記憶力の低下を嫌でも実感させら

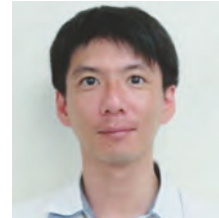
れ、落ち込む毎日でした。それがいつしか、理論とこれまでの経験とがつながり始め、学ぶ楽しさを実感できるようにまでなり、今では充実した日々を過ごしています。

前期で一番の大きな収穫は、協働的に授業改善に取り組む楽しさを実感できたことです。これは、今後の教職人生にとって、大きな宝になると感じています。また、教育委員会を始めとする教育関連施設での実習は、ここに来なければ経験できなかったことであり、大変貴重な機会となりました。そして、院生室で教育について熱く語り合う時間もこれまた楽しく、日々たくさんの刺激を受けています。

私自身が今実感している学びの楽しさが、個人テーマとしている「不登校」についても何らかの鍵となると信じ、引き続き、邁進していきます。

一年次ミドルリーダー養成コース

下村 亘（八戸市立旭ヶ丘小学校教諭）



「学校は子どものためにある。」教職大学院での学びは、当然のように使われてきたこの言葉の意味を再考することになりました。「子どものため」と言いながら、学校運営の都合に子どもを合わせすぎている部分はな

かったか。授業を進ませるために、主体性を削いでいたことはなかったか。そもそも学校とは社会の中で見た時にどんな存在なのか。自身のこれまでを猛省する日々です。また、弘前・青森市内を中心に、様々な校種・教科・他地域の授業の参観や施設を見学させていただいたことも、自分の視野を広げる大きな一因となりました。これからの教育を考えていくにあたり、子どもたちも教職員も「常識を身に付け、常識を打ち破る」ことが必要だと考えています。これまで自分が当然だと思い込んでいたものを打ち破るために必要なもの。それをこれから考え、教職大学院の仲間とともに意見交換をしながらさらに研究を進めていきたいと思っています。

ミドルリーダー養成コース

下山 達彦（県立弘前実業高校教諭）



教職大学院で学ぶ喜び「子どもたちの豊かな未来のため」という大きな目標や、「学校現場の抱えている課題を少しでも解決できるような研究を」という中くらの目標から逸れ

ないよう、この4月から始まった中年の学生生活を実直に送っているつもりではありますが、人間一人の生活は日々の積み重ねでございまして、どんなに崇高な目標を掲げていてもそれだけを糧にして学びの意欲を持続させることは至難の業であります。私自身もまた例外なくその事実から逃れる術を持ち



合わせておりません。しかしながら、そのような私  
が半年経過した今もなお学びの意欲を持ち続けてい  
られるのには訳があります。紙面の関係上、事細か  
な紹介はできませんが、キーワードにて紹介いたし  
ますのでご想像いただければ幸いです。敬具。

共に学ぶ仲間、新たな気付きを与えてくれる先生  
方、ブナコの照明とこぎん刺しを装飾した自習机を  
有する図書館、旧外国人教師館の弘大カフェ（大正  
時代の建築で文化庁「登録有形文化財」）

### ミドルリーダー養成コース

神 大 輔（つがる市立車力小学校教諭）



早いもので、教職大学院で学  
び始めてから半年が経とうとし  
ています。課題やレポートに追  
われながらも、充実した日々を  
過ごすことができました。幅広  
い内容の授業では、多くの知識  
や理論を学び、これまでの実践

を踏まえた多様な意見を院生のみなさんと交流させ  
ることで、考えを深めることができました。また、  
小学校以外の学校や教育関連施設等での実習では、  
教育現場における縦の連携と横の連携の重要性につ  
いて再認識することができました。昨年度までの自  
身を振り返ってみると、担当になっている学級や校  
務分掌など、学校の一部分にしか目を向けられてい  
なかったように思いますが、教職大学院での学びを  
通して、教員としての視野の広がりを感じています。  
これから始まる後期においても、学びを深め視野を  
広げることで、学校や地域、そして子どもたちの学  
びに貢献できるように自身の力量を高めていきたい  
と考えています。

### ミドルリーダー養成コース

成 田 綾 子（県立青森中央高校養護教諭）



怒涛の前期が終わりました。  
たくさんの講義を受け、学部卒  
の院生や現職の院生と意見交換  
をする中で、自分では深く考え  
てこなかった学校組織、教育課  
程、学校経営、教科指導などに  
ついて学び、学校を俯瞰して考

えることができるようになりました。今までは保健  
室から学校を見ていましたが、学校全体や社会から  
保健室を見、何が求められているのかを考えてみた  
いと思います。

また、幼稚園から特別支援学校や高等学校まで、  
各校種の授業を見学させていただいたり、院生の授  
業を見学したことは、自分にとって大きな学びとな  
りました。実習後の省察の時間に、教科や校種を超  
えて話し合う中で、どの校種にも共通して子どもた  
ちに「育てたい力」があるということに気づかされ  
ました。

後期では、学んだ理論を整理し、今後の実践にど  
う結びつくのかを考え、深めていこうと思います。

### ミドルリーダー養成コース

成 田 幸 子（弘前市立時敏小学校教諭）



教職大学院での学びは、日々、  
とても充実しています。自身の  
教育実践を振り返りながら講義  
を受けることで、実践と理論の  
往還ができ、自分自身の課題が  
明確になるとともに新たな問い  
も持つことができました。前期

を終えた今、改めて教師として学び続けることの  
大切さを実感しているところです。

さて、教職大学院の前期を振り返ってみますと、  
教育関連施設における観察実習では、子どもたち  
の成長を支える行政の方々の熱意と努力を目の当  
たりにし、実践意欲が高まりました。また、附属  
学校園等の観察実習では、異校種間の学びのつな  
がりについて考えることもできました。前期は、  
毎日の講義や実習だけでなく、青森県内の各学校  
の校内研修に参加したり、附属小学校で授業をさ  
せていただいたりと、教職大学院だからこそでき  
る経験を多く積むことができ、私自身の財産にな  
りました。大学院生として学び直しができること  
への感謝を忘れず、前期の学びを後期にも生かし  
ていこうと思います。

### ミドルリーダー養成コース

三 上 豊 広（県立弘前第二養護学校教諭）



教職大学院での前期の学びを  
振り返ってみると、これまで特  
別支援教育のことばかりに目が  
いきがちであったことや、経験  
で得た学びばかりに頼って教育  
していたことに気付かされる  
日々でした。

また、新学習指導要領の内容については、何を  
どのように学び、子どもたちがどう学びを深めて  
いくのかという視点をもって教育にあたることの  
大切さを知り、またミドルリーダーについては、  
学校組織の中でどのような役割があり、どうマネ  
ジメントに関わっていく必要があるのか、組織が  
まとまるにはどのような方法があるのかなどにつ  
いて学ぶことができたことなどが大きな収穫だと  
感じています。

後期は、自分のテーマに関する研究や興味深い  
内容の選択授業にも取り組むことになっていま  
すので、頭の中をアクティブに働かせながら、新  
しいアイデアや視点を取り入れて自分なりの考え  
をもてるよう、主体的に取り組んでいきたいと思  
います。

## 院生と教員による懇談会（8月8日のFD活動）の内容

### ◎院生による前期授業アンケートより



- 1 教育実践開発とミドルリーダー養成コースの院生と一緒に学ぶことができたのが良かった。
- 2 話し合いによって学びが深まった。もっと話し合いの時間があっても良かった。
- 3 演習として院生による発表が行われる場合、その準備を行う時間の確保が難しかった。
- 4 教育実践研究法など、教育実践開発とミドルリーダー養成コースの院生が研究テーマに関して議論する場面にあっては、例えばメンター実習におけるメンター・メンティ間の関係性を活用できるようにしてはどうか。

**回答** ミドルリーダー養成コースの院生には、最終的には自分の学びを同僚にどのように広めていくかが問われる。教職大学院はそのバックアップをしていく。

教育実践開発コースの院生には、ミドルリーダー養成コースの院生をモデルにしながら、将来的にはスクールリーダーを目指せるような学びを重ねてほしい。

### ◎今年度前期を終えて～院生からの声～

#### （ミドルリーダー養成コース2年）

- 1 主担当教員のみならず複数の教員による研究指導が受けられる点が良い。
- 2 勤務校で研修の場に臨む際は、教職大学院で学んだことを伝達するというのではなく、現場の同僚教員に受け入れられるような姿勢が重要だと感じた。
- 3 実践研究の一環として実施した勤務校での研修に、教職大学院の教員が参加することは、勤務校の同僚教員にとっても有意義である。
- 4 勤務校において、校長先生や同僚教員に対し、教職大学院における実践研究の意義について、もっと理解を深めてもらえるような説明ができれば良かったという反省がある。

#### （教育実践開発コース2年）

- 1 教科領域にかかる授業科目においては、模擬授業をベースにした演習のみならず、実習校での授業実践の分析なども取り入れてほしい。

**回答** 授業力向上を目指すために、模擬授業を主体にしたが要望のとおり実習校での授業分析も大切である。今後、このことも含めて検討したい。

#### （ミドルリーダー養成コース／教育実践開発コース1年）

- 1 院生室の環境として、PCの配置等には満足しているが、院生間の話し合いや作業を行うためのスペースがもう少し広く確保されると良い。

**回答** 10月には2年次ミドルリーダーの部屋の確保が可能になり、作業スペースを確保できることになるので、今少し我慢してほしい。

- 2 授業では課題が課されることも多く、研究テーマについてじっくり考える時間をとることができなかった。
- 3 ミドルリーダー養成コースの院生にとっては、学校現場から教職大学院という生活環境の変化や人間関係に戸惑うことが多かった。



## 10月24日（水）に第2回進学説明会を実施します

第Ⅱ期の入試が11月24日（土）に行われます。その説明会を10月24日（水）に行います。教職大学院への進学を考えている方は是非この説明会に参加してほしいと思います。皆様のお越しをお待ちしております。

月日：10月24日（水）、場所：弘前大学教育学部1階大教室、時間：16：00～

〈編集・発行〉

弘前大学教職大学院 入試フォローアップ部会

弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）News Letter 第5号 2018.10.3発行

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地

Tel 0172-36-2111（代表）

メールアドレス k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp

H P 弘前大学教育学部（教職大学院をクリック）